

令和 6 年 4 月 27 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K18292

研究課題名（和文）近現代イスラームにおける「排除」と知識人に関する研究

研究課題名（英文）A Study of "Exclusion" and Intellectuals in Modern and Contemporary Islam

研究代表者

後藤 絵美 (Goto, Emi)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・助教

研究者番号：10633050

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近現代におけるイスラームの知識の「統合」にあらわれる「排除」の現象に着目し、その背後にある権力構造を明らかにすることを目指した。具体的には、20世紀エジプトにおける「近代主義者」「異端者」「女性」「復古主義者」の事例を取り上げて、彼ら彼女らが経験した「排除」の論理とそれまつわる圧力についての資料的分析を行った。その結果、近現代のムスリム知識人を取り巻く思想状況の特徴やそれを支える権力構造の一端が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「イスラーム」の枠組みから排除された人々に光をあてることで、イスラームとそうではないものの間の境界を、誰が、どのように決めてきたのかを明らかにしようと試みるものであった。近年、ジェンダー研究により、男女の境界線の揺らぎや、それを決める際の権力性や暴力性が指摘されてきたのと同様に、本研究でも、イスラームについての境界線に揺らぎがあることや、「イスラームとはこういうものである」という断定的な語りのもつ権力性や暴力性を浮き彫りにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the phenomenon of "exclusion" in the integration of Islamic knowledge in modern and contemporary times, and aimed to clarify the power structure behind this phenomenon. Specifically, I conducted a material analysis of the logic of "exclusion" experienced and the pressures surrounding it, taking up the cases of "modernists," "heretics," "women," and "fundamentalists" in twentieth-century Egypt. As a result, the characteristics of the ideological situation surrounding modern and contemporary Muslim intellectuals and some of the power structures that support it have been uncovered.

研究分野：現代イスラーム研究、ジェンダー研究

キーワード：イスラーム 排除 知識人 近代主義者 異端者 女性 復古主義者 エジプト

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は本研究開始以前の研究で、20 世紀後半のエジプトでみられたヴェール着用者の増加という現象を扱い、その背景にイスラームの知的状況の変化があったことを明らかにした。その変化とは、女性が、「男性を誘惑する存在」としてではなく、信仰心をもった一人の人間として、「神のためにヴェールをまとう」という言説が浸透したことである。この結論は、主に 2003 年から 2005 年にかけてエジプトに滞在する中で蒐集した書籍や新聞・雑誌記事、宗教講話を録音したカセットテープ、冊子、テレビ番組、裁判資料等の分析から得られたものである。これらの資料は、宗教知識人の他に、近代教育を受けた説教師や著述家、法律家や裁判官、芸能人女性といった異なる背景や地位を持つ男女の手によるものであった。

これらの現代的な資料の分析を通じて見えてきたのが、イスラームの知識が、その発信者やメディアの多様化にもかかわらず、一定の言説の浸透という形で「統合」されてきたことである。その後、科研費基盤研究(A)「イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究」(研究代表者:長沢栄治、16H01899)への参加等を通じ、ジェンダー学を持つ権力構造や多数者の論理に対する問題意識に触れ、「統合」の過程の中に「排除」の動きがあることを意識し始めた。そうした流れの中で着想したのが本研究であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、近現代におけるイスラームの知識の「統合」を、特定の言説の「排除」を軸に考察することである。前近代のイスラームでは、確立した法学派の枠組みの中で教育を受けた少数の男性宗教学者が、イスラームの学問的知識を生み出し、その統合を担ってきた。一方、近現代においては、西洋近代的な法体系や教育制度が導入される中、多様な背景と地位を持つ男女の知識人が登場し、マスメディアを通して、それぞれの思考や思索を世に問うようになった。この新しい状況の中で、イスラームの知識の統合は、一つに特定の立場の者を「排除」することで成されてきた。これまで、少数の個人や集団の思想や言説に関する研究は着手されてきたが、それら相互の関係性や、全体としての「統合」や「排除」の現象、それを支える権力構造について、体系的な研究は端緒についたばかりである。本研究では、20 世紀エジプトの事例から、イスラームの知識の「統合」と「排除」の過程を詳細に辿り、その論理と権力構造を明らかにすることを目指した。「統合」や「排除」は、世界的に観察される現象であり、本研究は、この現象の比較検討のために重要な参照点となるものと考えた。

## 3. 研究の方法

本研究は 20 世紀エジプトの事例から、イスラームの知識の「統合」と「排除」の過程を辿り、その論理と権力構造を明らかにするものである。その際、「排除」の対象となった事例として、「近代主義者」「女性」「異端者」「復古主義者」を取り上げた。

※「復古主義者」については当初、事例とする予定であったが、研究期間内に扱うことができなかった。

## 4. 研究成果

### (1)「近代主義者」:カースィム・アミンの新しいイスラーム論

19 世紀末エジプトのムスリム知識人の一部の間には、西洋文明との対峙のために、時代状況に合ったイスラームの解釈と実践が必要であるという考えが生まれていた。法律家カースィム・アミン(1863-1908)もその考えに共感した知識人の一人である。アミンは、イスラームの理解を現状に合わせて変化させることは、イスラーム的伝統からの「逸脱」ではなく、時代遅れの慣習や人間関係からの「解放」であると主張し、とくに女性の地位を保護するためにイスラームの解釈と実践を変えることを提案した(『女性の解放』*Tahrir al-Mar'a*, 1899)および『新しい女性』*Al-Mar'a Jadida*, 1900)。しかし、その主張は必ずしも歓迎されず、少なくとも 30 の「怒りに満ちた」反論を受けたという(Margot Badran, *Feminists, Islam, and Nation*, Cairo:1996)。後にアミンの主張はしだいに受け入れられていったが、20 世紀後半になると再び彼を「イスラームの理解や実践を歪めた近代主義者」と非難する声が聞かれるようになった。本研究ではアミンの著作の分析に加え、長期にわたる彼の評価の移り変わりを検討し、「統合」と「排除」の現象について考察した。

研究期間中、アミンの二つの著作(『女性の解放』および『新しい女性』)の翻訳に取り組んだ。その作業を通して明らかになったのは、第一に、アミンとその批判者との間で、イスラームに対する認識にずれがあったことである。後者が人間による知的介入もまたイスラーム的伝統の一部を成すと捉えていたのに対して、アミンは同時代に始まったイスラーム改革思想を根拠に、イスラームの核心と人間による介入を分けて考える必要を強調した。第二に、アミンは当初イスラームから外れた異端者として非難にさらされたが、彼の議論は、女性や男性の知識人の間にしだいに浸透していった。アミンの思想は、同時代に西洋からの影響も受けつつ広がっていった「男女平等思想」と重なるものだったからである。

「近代主義者」としてアミンは排除されたが、もう少し長い視点でみると、彼の思想はむしろ「統合」の方向性を示していたと言うこともできるであろう。一方、アミンに対する後の時代の評価がもつバイアス（彼を「西洋」の思考様式や政治的・知的言語に依存するエジプトの「アウトサイダー」とする見方）や、その結果としてのアミンに対する新たな「排除」についても考察した。以上の議論の詳細は、口頭発表の他、後藤絵美「解説1」『アラブの女性解放論』（カースィム・アミン著、岡崎弘樹・後藤絵美訳）、法政大学出版局、2024にまとめた。

## (2)「女性」：マラク・ヒフニー・ナースィフ、フダー・シャアラウィーとイスラーム

エジプトにおけるフェミニズム（「その性別ゆえに制限を受けている女性がいるということに気づき、制限を取り除こうとし、より公正なジェンダーのあり方を導き出そうとすること、そうして女性の新たな役割、新たな男女関係を築こうとすること」, Badran 前掲書）は、カースィム・アミンの女性解放論よりも以前、1890年代初めから、主に女性知識人らによって始まっていた。エジプトが中東地域のジャーナリズムの中心地になると、女性たちは雑誌や新聞、書物を通して、後には講演会などの場を使って、自らの考えを発信し始めた。

マラク・ヒフニー・ナースィフ（1886-1918）は、イスラーム改革思想に共感する知識人の父親のもとに生まれ、当時、公教育として女子が享受しうるもっとも高い教育を受け、教員資格試験のエジプト人女性初の合格者の一人となった。1900年代後半、父親も関与していたウマ党（穏健な民族主義政党）の機関誌『新聞（ジャーリダ）』の「女性をめぐる」という欄に、エジプトの女性に関する記事を寄稿するようになった。

上流階層出身のフダー・シャアラウィー（1879-1947）が、女性たちによる運動に参加し始めたのは1900年代終わりである。エジプト大学で毎週金曜日に開催された女性のための公開講座もその一つであり、そこにはマラクも講師として登壇した。当初裏方に徹していたフダーが、運動の全面に出るようになったのは、1918年にマラクが早逝した後のことであった。1919年、エジプトでイギリスからの独立を目指す運動が活発化すると、フダーは女性たちを率いて、イギリスからの独立を目指すための抗議の後進を行った。彼女が「あらゆる権利や義務において男性と同等となることができるよう、女性たちの教養と社会性を高めること」を目的としたエジプト女性連合を結成したのは、エジプトが独立した後の1923年であった。

本研究では二人の著作や伝記をもとに、その個人史と思想を辿り、二人のつながりを考察した。先行研究においてマラクとフダーは、「土地固有のノイスラーム的フェミニズム」と「西洋的ノ世俗的フェミニズム」をそれぞれ体現する人物として対比されてきたが、本研究において二人のイスラーム認識には、倫理や女性としての体験をめぐる、多くの共通点があることが明らかになった。これらの点については、後藤絵美「アラブの近代とフェミニズムの開花」姜尚中ほか編『アジア人物史[19-20世紀]民族解放の夢』集英社、2023と後藤絵美「ヴェールを外すこと——《憧れ》にうつるエジプトの近代」山口みどり・中野嘉子編『憧れの感情史——アジアの近代と新しい女性』作品社、2023で論じた。

## (3)「異端者」：ナスル・アブー＝ザイドのクルアーン論

1995年、エジプトの裁判所は、当時カイロ大学の助教授の職にあったナスル・ハーミド・アブー＝ザイド（1943-2010）のクルアーン（コーラン）に関する著作が異端であり、異端者とムスリム女性の結婚は許されないという訴えを受け、アブー＝ザイドと妻の離婚を言い渡した。この判決の後、アブー＝ザイドは、妻とともに母国を離れ、オランダへ亡命することを余儀なくされた。本研究では、この事件を発端に「排除」の現象について考察した。

異端の訴えの根拠となったアブー＝ザイドの主要著作、『テキストの意味——クルアーン学の研究』（1987）『宗教言説批判』（1990）については多くの研究があるが、本研究で着目したのは、それらが日本の宗教観に触れる中で執筆されたという点である。アブー＝ザイドは1985年3月から1989年7月まで、大阪外国語大学（当時）のアラビア語のネイティブ教員として日本に滞在した。その間、寺社を訪問し、仏壇と神棚が隣り合わせで置かれた家があることを知り、信仰の有無にかかわらず初詣で手を合わせたり、クリスマスを祝ったり、お盆の行事に参加する人々がいるという状況を目の当たりにした。それは啓典クルアーンと預言者の時代にすべての答えがあると強調される当時のエジプトの論調とは大きく異なる体験であった。日本では、多様な宗教が混在する中にも倫理的な統一があるのはなぜかという問いを抱いたアブー＝ザイドは、その答えの一端を新渡戸稲造著『武士道』に見出した。彼は同書を英語からアラビア語に翻訳した。

本研究では、『武士道』のアラビア語訳に付された長い「序文」を分析することで、アブー＝ザイドと彼を「異端者」と呼んだ人々（「イスラーム主義者」）の間に「伝統」に対する考え方の違いがあることを明らかにした。イスラーム主義者にとって伝統とは、預言者の時代に近づくことであるのに対して、アブー＝ザイドは伝統を、時間や思考を重ねて、新たなものを生み出していく作業だと捉えていた。後者の認識は少数派のものであり、アブー＝ザイドも「異端者」とされたが、本研究では、その認識が少しずつ広がり始めていることも指摘した。以上の議論は、口頭発表の他、Emi Goto “A Turn to Hermeneutics: Nasr Hamid Abu Zad’s Rethinking of Religion and Tradition in Japan” in Mohammed Moussa and Emi Goto (eds.), *Beyond Modernity: Critical Perspective on Islam, Tradition and Power*, London: Rowman & Littlefield, 2023にまとめた。

コロナ禍の影響を受けて 2 年間の研究期間延長を許していただき、研究成果を刊行物の形で残すことができたのは幸いであった。現在のところわかってきたのは、「統合」や「排除」の現象は当初考えていたよりもずっと複雑だということである。たとえば、「近代主義者」に対する排除の現象が一時期顕著であると思われても、かれらの主張は社会の中に少しずつ浸透し、結果的に「統合」の一部となっている。また、「イスラーム主義者」の声が大きいとしても、それ以外の声は完全に「排除」されるわけではなく、多数派の議論の方向性を変える可能性をもつ。

今後は「統合」と「排除」の関係についてさらに検討し、議論の精緻化に努めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Emi Goto
2. 発表標題 Qasim Amin and the roles of male intellectuals in the development of feminism in Egypt
3. 学会等名 Workshop: Muslim Feminism Thoughts in the Early 20th Century: Qasim Amin and Tahar Haddad (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Emi Goto
2. 発表標題 Rethinking Religious Boundaries through Nasr Hamid Abu Zayd's Writings on Japan
3. 学会等名 Transregional Studies Day, Institute of Asian and African Studies (IAAW) Humboldt University Berlin (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 後藤絵美
2. 発表標題 イスラームとジェンダー平等 ナスル・ハーミド・アブー＝ザイドの議論の論理と可能性
3. 学会等名 日本中東学会第38回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Emi Goto
2. 発表標題 Fighting Over Homes: The Story of a "Heretic" in Twentieth-Century Egypt
3. 学会等名 Ito International Research Centre Symposium "Crossing Boundaries: Migration, Mediation, Morality" (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Emi Goto
2. 発表標題 Postsecular Challenges to the Unification of Islamic Discourses: The Life Experiences and Critical Writings of Nasr Hamid Abu Zayd
3. 学会等名 Engaging the Contemporary (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 後藤給美
2. 発表標題 エジプト女性運動の「長い20世紀」 連帯までの道のり
3. 学会等名 シンポジウム アジアの女性(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 姜尚中、青山 亨、伊東 利勝、小松 久男、重松 伸司、妹尾 達彦、成田 龍一、古井 龍介、三浦 徹、村田 雄二郎、李成市	4. 発行年 2023年
2. 出版社 集英社	5. 総ページ数 840
3. 書名 アジア人物史 第10巻 民族解放の夢	

1. 著者名 Emi Goto	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa	5. 総ページ数 215
3. 書名 Created and Contested: Norms, Traditions, and Values in Contemporary Asian Fashion	

1. 著者名 高尾 賢一郎、後藤 絵美、小柳 敦史	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 370
3. 書名 宗教と風紀	

1. 著者名 Mohammed Moussa, Emi Goto	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Rowman & Littlefield Publishers	5. 総ページ数 209
3. 書名 Beyond Modernity: Critical Perspectives on Islam, Tradition and Power	

1. 著者名 山口 みどり、中野 嘉子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 作品社	5. 総ページ数 352
3. 書名 憧れの感情史	

1. 著者名 Christopher Beward, Beverly Lemire, Giorgio Riello	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 1524
3. 書名 The Cambridge Global History of Fashion	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計6件

国際研究集会 Seminar "Global Social Theory in the Muslim World"	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Seminar "Covid-19 in Egypt: Public Health and Government Responses"	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 What is the State of Islamic Political Thought?	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Illustrating 'Postsecular', Images of Muslim Societies	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Whither Tradition? Back to the Past or Looking to the Future	開催年 2018年～2018年
国際研究集会	開催年 null年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------